

先史アジア語とその残影 (9)

近 藤 健 二*

はじめに

言語地図を塗り替えてきたのは人々の移住である。たとえばインド・ヨーロッパ語族は、今からおよそ 5000 年ないし 6000 年前にどこかの限られた地でインド・ヨーロッパ祖語なる言語を話していた一民族があちこちに散らばってインド、中央アジアからヨーロッパのほぼ全域に至るまでの地域をおおう大語族になった。またインド・ヨーロッパ語族のスペイン語やポルトガル語が中南米諸国での主要言語となったのも、スペイン語話者やポルトガル語話者がそこに移住し、彼らの子孫がその地域の支配者層になったからである。

人々の移住が大語族をつくったのは、少なくとも 500 言語以上、数え方によっては 1000 を超える言語を擁すると言われるオーストロネシア語族の場合も同じである。この語族は北は台湾、ハワイ諸島、南はニュージーランド、東はイースター島、西はマダガスカル島にまで至る広大な地域の島々に分布する一大語群であり、日本では南島語とも呼ばれる。

本稿で取りあげるのはこの南島語である。南島語の源郷はどこであったのか、そして南島語は系統的に世界のどの言語にもっとも近いのか、これを明らかにすることがここでの主要な目的である。なお本稿には、日本語の成立に南島語がかかわったとする仮説を棄却しようとする狙いも込められている。

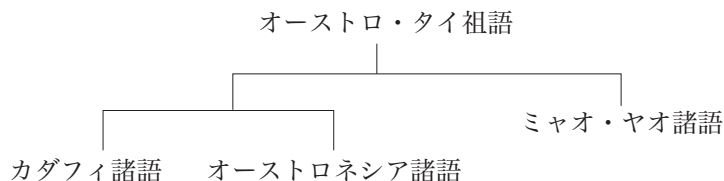
1. 源郷とされてきた地域

南島語の源郷がどこであったかについては、いくつかの説がある。20 世紀末までに提案された仮説は土田 (1988 : 1054-055) に要約されている。それによると、まず最初にオランダの H・ケルンが 1889 年に、南島語はインドシナ半島北部から中国南部の沿岸地帯に発したと推定したということである。その後、ダイエン (1956) が、非常に遠い関係にある同系言語が密集している地域が源郷である可能性が高いとしたうえで、その候補地として 1) ニュー

*人文学部特任教授—言語学

ギニアおよびその周辺地域、2) 台湾、3) スマトラ西部の島嶼部をあげた。そして、ニューギニアの可能性がもっとも高いという考えを示した。

これとは大幅に異なる提案もされている。ベネディクト（1942）による「オーストロ・タイ仮説」がそれである。三谷（1988:1042）がこれを紹介しているように、ベネディクトは「古代南中国におけるタイ・カダイ・インドシナ複合体（後のオーストロ・タイ祖語）の存在を仮定し、インドネシア諸語は、そこから（おそらく海南島を経て）台湾、フィリピンその他の諸島嶼に分岐していったものであり、一方、そのまま大陸に残ったのがタイ諸語なのであって、タイ語と中国語の類似は、従来信じられてきたような親縁関係によるものではなく、両者の長年の接触によるものである」と見なした。その後ベネディクト（1975）は、



のような系統関係を措定し、オーストロネシア諸語は南中国からまず（海南島を経由せずに）台湾に直接渡り、そこから諸島嶼に拡散したものであるという考えを示した。

ところで今世紀になってから、南島語の拡散と南島語話者の移住がいつ、どういう経路で起こったかを詳細に示した研究が二つ現れた。

一つはグレイほか（2009）である。この研究は、これまでの南島語研究によって集積された言語資料にもとづき、400 にのぼる言語の語彙的変異をコンピュータで解析することによって問題解決をはかろうとしたものである。これによると、南島語の起源は 5200 年前の台湾に求められるという。その後、南島語話者は大海原に出てフィリピンやインドネシアの島々に移り住み、3000 年前にミクロネシアに、2800 年前にポリネシア西部に達したという。そして 1500 年前以降にポリネシア中部および東部へと広がっていったということである。

もう一つの研究はムードレイほか（2009）である。これは、人の胃に寄生するピロル菌の変異を追うことによって、南島語話者が拡散していった時期と経路を究明しようとしたものである。そしてその結論は、言語の変異を追究したグレイほか（2009）のそれと見事に一致したのである。

これら二つの研究成果はともに 2009 年 1 月 23 日に発行されたアメリカの科学誌 *Science*（323 巻）に発表されたこともあって話題を呼んだが、私には南島語の起源に関して割り切れないものが残った。確かに、これらの研究を通じて南島語が台湾から南下していったものであることは確定的になった。しかし、台湾以前はどうか。台湾もいわば経由地であったはずである。どこでどういう言語を話す人々が台湾にやって来たのかという問題は決着していない。

この点に関して、グレイほか (2009) の主張は歯切れが悪い。曰く、“One potential problem with this analysis is that Old Chinese may be too distantly related to Austronesian to reliably root the tree, whereas Buyang and the other Tai-kadai languages may be a sister group to Malayo-Polynesian.” (pp. 480–81) タイ語やタイ・カダフィ諸語と南島語との間に系統的關係が認められるかもしれないという主張は以前からある考えを繰り返したものにすぎない。そして、古代中国語と南島語とは同じ系統樹に位置付けるにはあまりにも遠い関係にあるという主張も従来の常識を超えるものではない。

2. 古代中国語と南島語との比較

中国語が南島語と系統的につながっているなどと考えた言語学者は、これまでただの一人もいない。だから、両言語の関係は「あまりにも遠い」と誰が言おうとも、それを責めることはできない。台湾が中国大陆のすぐ隣にあるにもかかわらず、ベネディクト (1942) が「おそらく海南島を経て」と考えたのも、海南島がヴェトナムのハノイよりもやや南に位置していて、そこがタイ諸語あるいはカダフィ諸語が分布する地域に近いからであったと思われる。後にベネディクト (1975) は南中国からの海南島を経由しないルートを推定したが、この場合も南中国が「オーストロ・タイ祖語」圏であったと想定したうえでのことに変わりはない。

ここで私見を述べれば、南島語話者の祖先は台湾付近の中国大陆沿岸部から海を渡った可能性がいちばん高い。そして彼らは、先史中国語話者であったと考えられる。出発地はともかく、移住者たちの故郷が中国語圏であったという考えにはそれなりの根拠がある。南島語と古代中国語とが、実際は非常によく似ているのである。下に示す古代中国語と南島祖語の組みあわせを見れば、その類似性が偶然によるものではなく、台湾に渡り南太平洋に広がっていった人々の言語が中国語起源であるがゆえの類似性であると容易に理解されよう。

二つの言語を比較するにあたって依拠する文献は、古代中国語に関してはデンプヴォルフ (1934-38) である。ただし、南島語特有の発音は基本的にダイエン (1971) に従い次のように表される。

c : ky と tj の中間音	q : h の強い音
D : 巻き舌の d	s : ts に近い音
j : gy と dy の中間音	T : 巻き舌の t
ñ : ny のような音	

なお、南島祖語の表記において用いられる (ŋ) は ŋ またはゼロ、それ以外の () はその内部の音が不確定であることを表す。また [aə] や [dD] は a または ə, d または D であることを表し、それ以外の [] はその中の音が一部の言語に存在することを表す。

古代中国語も南島祖語もその発音は推定されたものであるが、一般に推定形の印として用いられるアステリスク (*) を付けないでそれを示す。南島祖語は通例、南島諸語に見られる同源語の集まりの中から音の消失がいちばん少ない形が選ばれている。したがって、それは真の意味での祖形ではないという理解が必要である。

2.1. 一つの語根を含む南島祖語

ここで言うのは、単一の語根から成る南島祖語と古代中国語との比較である。この場合、たとえば

lanj (郎)「おとこ」 $\longleftrightarrow$ lakih「おとこ・おっと」
liar (離)「はなれる・はなす」 $\longleftrightarrow$ laluh「通りすぎる」

のように、古代中国語の1語と南島祖語の1語を対比して示すだけでなく、同一語根を有する単語群を1語と対比して示すこともある。さらに次のように、単語群と単語群を対比して示すこともある。

dziuat (絶)「たつ」 duat (奪)「うばう」	$\longleftrightarrow$	duat (奪)「うばう」 təstəs「ひきさく・ひきちぎる」 tastas「ひきはがす・もぎとる」
gɿəm (擒)「とらえる・とりこ」 kab (蓋)「おおう・ふた」 fiəp (合)「あう・あわせる」	$\longleftrightarrow$	kamkam「つかむ」 kəmkəm「(ドアなどを)しめておく」 kubkub「おおう」 kupkup「つかむ・もっている」

ここに示した例からもうかがわれるように、南島祖語には同一語根を重ねたいわゆる疊語が目立って多い。しかし、下に列挙する例にも多く含まれているように、疊語であることがすぐには分からない語が少なくない。音の消失が起こったからである。上に示した疊語はそろって CVC (C=子音, V=母音) という語根を重ねた形をしているが、少なからぬ疊語において音の消失が起こっている。たとえば、

lɔg (勞)「つかれ・つかれる・つかれさす・労働」 $\longleftrightarrow$ ləlɔg「つかれている」

という対応例の ləlɔg は語中の -g- を失っている。これとはちがって、語頭音や語末音を失った疊語も存在する。

2.1.1. bluəg (婦) や pog (報) と同源の南島祖語

ここで取りあげるのは、語頭子音が b・m・p・p^h で語末子音が g・k・ŋ・n の古代中国語に対応する南島祖語である。

- biǎŋ (平) 「たいら・たいらか」 ↔ pəpak 「たいらである」
 biǎn (飯) 「めし・くらう・くらす」 ↔ paŋjan 「たべる・料理」
 biek (關) 「ひらく・あける・あく」 ↔ $\begin{cases} \text{baŋjah} \text{ 「あいている」} \\ \text{bukah} \text{ 「あける・ひらく」} \end{cases}$
 biuəg (婦) 「おんな」 ↔ binay 「おんな・女の人」
 biug (腐) 「くさる・くちる」 ↔ bəkbək・bukbuk 「くさった木材・腐葉土」
 biuŋ (逢) 「あう・であう」 ↔ papag 「であう」
 mak (膜) 「まく」 ↔ bəku 「凝固する・固くなった表皮」
 miuǎn (晩) 「くれ・くれる・おそい」 ↔ bəŋ[ih] 「よる」
 mɔg (毛) 「け」 ↔ buhuk 「け (毛)」
 muan (満) 「みちる・みたす・いっぱい」 ↔ $\begin{cases} \text{pənuh} \text{ 「いっぱいである」} \\ \text{bun} \text{ 「十分である・いっぱいある」} \\ \text{bunbun} \text{ 「あつめる」} \end{cases}$
 pāg (把) 「にぎる・手にとる」 ↔ biŋbiŋ 「手にもつ」
 pak (博) 「ひろい・ひろめる」 ↔ baŋbaŋ 「ひろい・ひろびろとしている」
 pǎn (板) 「いた」 ↔ panpan 「いた (板)」
 piúg (付) 「つける・つく」 ↔ bubuq 「つけくわえる・つけたす」
 pog (報) 「むくいる・むくい・しらせ」 ↔ $\begin{cases} \text{baghah} \text{ 「しらせる・つたえる」} \\ \text{buñih} \text{ 「しらせ・通知」} \end{cases}$
 pǒg (包) 「つつむ・つつみ」 } ↔ baŋjah 「容器・入れ物」
 bǒg (匏) 「ひさご・ふくべ」 }
 puən (本) 「もと・はじめ」 ↔ punah 「はじめ・起源」
 p^hak (拍) 「うつ・ぱんとたたく」 } ↔ pakpak 「うつ・たたく・はばたく」
 p^hǎŋ (抨) 「うつ・ぱんとはじく」 }
 p^hǎg (葩) 「はな」 ↔ buŋjah 「はな (花)」
 p^həg (派) 「わかれ・わかれる」 ↔ $\begin{cases} \text{paŋjah} \text{ 「分岐 (点)」} \\ \text{piyak} \text{ 「わかれる」} \\ \text{biyak} \text{ 「わかれる」} \end{cases}$
 p^huəg (剖) 「さく・さける」 ↔ wawaq 「ひらくこと・切開」
 p^huk (扑) 「うつ・たたく」 ↔ pukpuk 「道具でうつ・たたく」
 p^hiaŋ (芳) 「かおり・かんばしい」 ↔ baŋjih 「かおり・におい」
 p^hóg (泡) 「あわ」 ↔ bughə[q] 「あわ」

2.1.2. băt (拔) や piuăt (発) と同源の南島祖語

ここに示すのは、語頭子音が b・m・p, 語末子音が d・t の古代中国語に対応する南島祖語である。この種の語は少ない。

- băt (拔) 「ぬく・ぬける」 ↔ $\begin{cases} \text{putput} \text{ 「ぬく・むしる」} \\ \text{butbutu} \text{ 「ぬく・むしる」} \end{cases}$
 biuăt (伐) 「きる・うつ」 ↔ $\begin{cases} \text{basbas} \text{ 「きりおとす・きりたおす・うちたおす」} \\ \text{buDbuD} \text{ 「こまかくきる」} \end{cases}$

- miēt (密) 「ひそか・すきまがない」 ↔ pətpət 「密である・密集している」
 muət (没) 「しずむ・つきる・しぬ」 ↔ $\begin{cases} \text{patay} \text{ 「しぬ・しんでいる」} \\ \text{matay} \text{ 「しぬ・しんでいる」} \end{cases}$
 piet・pied (泌) 「汁がでる・汁をだす」 ↔ bisbis 「たらす・したる・したらせる」
 piet (畢) 「つくす・おわる・おえる」 ↔ putut 「折る・おわりにする」
 puāt (発) 「はなつ・出発する・あらわれ出る」 ↔ bətuḥ 「あらわれる」

2.1.3. duŋ (動) や thiŋ (焼) と同源の南島祖語

ここに取りあげるのは、語頭子音が d・dh・dz・t・tʰ・ts・s など、語末子音が g・k・ŋ・n の古代中国語に対応する南島祖語である。その数は非常に多い。

- dak (度) 「ものさし・めもり・のり」 ↔ sukat 「度量・ものさし・寸法・サイズ」
 dāk (宅) 「すまい・すまう」 } ↔ Duk 「定住地・住所」
 dūg (住) 「すむ・すまい」 }
 deg (啼) 「なく」 ↔ taŋis 「なく」
 dʰak (着) 「きる・つく」 ↔ təkah 「つく・到着する」
 dʰioŋ (虫) 「むし」 ↔ [t]aŋa[q] 「害虫」
 dūg (柱) 「はしら」 ↔ sakah 「はしら」
 dog (導) 「みちびく」 ↔ tuntun 「みちびく・案内する」
 dōg (調) 「しらべる」 } ↔ duga 「しらべる」
 dzǎg (査) 「しらべる」 }
 dōg (棹) 「さお・さおさす」 ↔ təkən 「支柱・棒・さお」
 dök (笛) 「ふえ」 ↔ siyuk 「口笛をふく・(鳥などが) なく」
 duŋ (動) 「うごく・うごかす」 ↔ sintak 「うごかす・ずらす・ぴくっとうごく」
 dhiaŋ (上) 「うえ・あげる・あがる」 ↔ ciŋciŋ 「上へあげる・たくしあげる」
 dhieg (匙) 「さじ」 ↔ $\begin{cases} \text{tu(n)duq} \text{ 「さじ・スプーン」} \\ \text{sənDuk} \text{ 「さじ・スプーン」} \end{cases}$
 dziak (耜) 「たがやす」 ↔ saka[h] 「たがやす」
 dzioŋ (崇) 「たかい・あがめる」 ↔ tiŋgiŋ 「たかい」
 ɖiak (液) 「たれる汁・液体」 ↔ dahak 「粘液」
 ɖiak (席) 「むしろ・せき・しく」 ↔ kasaŋ 「むしろ・マット」
 ɖiək (杙) 「くい」 ↔ tiyaŋ 「くい・さお・長い棒」
 ɖiög (揺) 「ゆれる・ゆする」 ↔ duyan 「ゆする・ゆれる」
 ɖioŋ (曜) 「かがやく・ひかり」 ↔ siyaŋ 「あかるさ・かがやき」
 sag (素) 「もと・しろい・しろ」 ↔ saksak 「しろい」
 siŋ (小) 「ちいさい」 ↔ Dikiq 「ちいさい」
 san (傘) 「かさ」 ↔ sahaŋ 「かさ」
 tek (滴) 「したたる・しずく」 ↔ tuDuq 「(液体を) たらす・したたらせる」
 tēŋ (打) 「うつ・たたく」 ↔ dakdak 「(槌で) うつ・たたく」
 tieg (知) 「しる・しらせる」 ↔ taqu 「なれている・しっている」
 tien (正) 「ただしい」 ↔ tənən 「ただしい」

- tuog (肘)「ひじ」↔sikuh「ひじ・かど・すみ」
 tuŋ (中)「なか」↔səDaŋ「中くらい・並」
 tiog (照)「てる・てらす」↔dadaŋ「てる・かがやく・あかるい」
 tiuk (燭)「ともしび・てらす」↔ $\begin{cases} dəkət & \text{「火をつける・点火する」} \\ [t]u[t]uŋ & \text{「火をつける・もやす」} \end{cases}$
 tög (眺)「ながめる・ながめ」↔səŋuk「ながめる」
 tuk (豚)「(槌などで) とんとんとたく・みがく」↔ $\begin{cases} DəgDəg & \text{「とんとんと軽くたく」} \\ DugDug & \text{「とんとんとたく」} \end{cases}$
 t^hag (土)「つち・大地」
 dieg (地)「つち・大地」
 t^hek (逃)「とおぎける・とおい」
 t^hɔg (超)「こえる・とおい」
 t^hian (煙)「かしぐ・にる」
 tsian (煎)「いる・にる」
 t^hiuk (触)「ふれる」↔daqis「ふれあう・接する」
 t^hiun (衝)「つく・つきあたる」↔tuŋzaŋ「つく・つきとばす・ける」
 t^hun (桶)「おけ」↔cantuŋ「つるべ(釣瓶)」
 thiag (罎)「ネズミ」↔tikut「ネズミ」
 thiog (手)「て・てにする」↔taŋaŋ「て(手)」
 thiog (焼)「やく・やける」↔səgsəg「もえる・燃焼する」
 tsəg (宰)「きる・さく」↔təktək「きりおとす」
 tsiek (積)「つむ・つもる・たくわえる」↔susun「積みあげる・貯蔵する」
 tsiög (焦)「こげる・こがす」↔saŋjit「こがす・においがする」
 tsiuk (足)「あし」↔sukuh「(犬・猫などの) あし・4分の1」
 tsiek (側)「かたわら・そば・わき」↔sisiq「ふち・わき・かたわら・側面」
 tsog (抓)「つまむ・つかむ」↔taŋtaŋ「つかむ」
 ts^hag (酢)「す・すい」↔cukah「す(酢)」
 ts^hieg「さす・とげ」↔ $\begin{cases} saksak & \text{「さす」} \\ susuk & \text{「さす」} \\ [t]usuk & \text{「さす」} \\ səŋət & \text{「とげ」} \end{cases}$
 ts^hog (草)「くさ」↔dukut「くさ」

2.1.4. dziəp (集) や t^həm (探) と同源の南島祖語

ここに示すのは、語頭子音が d・dh・dz・d̥・s・t・t^h・th・ts, 語末子音が m・p の古代中国語に対応する南島祖語である。このような語も、その数は少ない。

- dəm (壘)「かめ・酒がめ」↔ $\begin{cases} tabuh & \text{「(釣瓶など) 水をくむ容器」} \\ timba & \text{「水をくむ大きな容器」} \end{cases}$
 dhip (拾)「ひろう・手にいれる」↔dapət「うけとる・もらう・手にいれる」

2.1.5. dhiyar (睡) や tier (指) と同源の南島祖語

2.1.6. *kiak* (脚) や *k^hun* (孔) と同源の南島祖語

(8)

k^huk (哭)「なく」 ↔ gagak 「鳥のなき声」
 k^huŋ (孔)「あな」 ↔ qiyuŋ 「はな (鼻)」
 ŋuǎn (願)「ねがう」 ↔ qinjin 「熱望する」
 ngǎg (牙)「きば」 ↔ gigih 「は (歯)」
 noŋ (膿)「うみ・うむ」 ↔ nanah 「うみ (膿)」
 nög (尿)「ゆばり・小便」 ↔ qiə[q] 「尿・小便」
 fluəŋ (黄)「きいろ・きばむ」 ↔ kunin 「きいろい」
 xiaŋ (響)「ひびく・ひびき」 ↔ gukguk 「動物のなき声」
 xug (吼)「ほえる」 ↔ kaŋkaŋ 「ほえる」
 ・ug (謳)「うたう・うた」 ↔ ñaŋih 「うたう」

2.1.7. ker (継) や ġlag (露) と同源の南島祖語

ここで取りあげるのは、語頭子音が k・k^h・ŋ・x で語末子音が r の古代中国語、および語頭子音が ġl・kl・ŋl・xl で語末子音が g・k の古代中国語に対応する南島祖語である。

ker (継)「つぐ」 ↔ kəkəl 「絶え間ない」
 ker (計)「かぞえる・はかる」 ↔ qukur 「はかる」
 kuər (飢)「うえる」 ↔ kilkil 「がつかつたべる」
 kuər (帰)「かえる」 ↔ quliq 「かえる・もどる」
 kuār (丹)「えぐる」 ↔ kərik 「けずりとる」
 kuar (褰)「つつむ・つつみ」 } ↔ { karah 「かわ (皮)・から (殻)」
 fier (𠂔)「かくす・おおいかくす」 } ↔ { karuŋ 「ふくろ」
 fiuər (囿)「かこむ・かこみ」 } ↔ { kuluk 「被り物・帽子・頭巾」
 kuar (鍋)「なべ」 ↔ gu[r]ih 「陶製のなべ」
 kuār (蝸)「カタツムリ」 ↔ kuhul 「カタツムリ」
 k^huər (魁)「かしら・さきがけ」 } ↔ quluh 「あたま」
 k^huər (塊)「つちくれ・かたまり」 }
 fiuər (回)「まわる・まわす」 ↔ { ġilaŋ 「ゆれる・ゆれうごく」
 kəluk 「まげること・湾曲」
 kulilin 「…をぐるっとまわって」
 qiluk 「湾曲・ふくらみ」
 xiaŋ (稀)「まれ・うすい・ごく少ない」 } ↔ { kuraŋ 「欠如・不足・ごく少ない」
 xiaŋ (希)「まれ・ねがう・こいねがう」 } ↔ { kələŋ 「好意・愛情」
 xiuər (暉)「ひかり・かがやく」 } ↔ { galak 「もえあがる」
 xiuər (輝)「てる・かがやき」 } ↔ { ga[r]aŋ 「熱い」
 ġilaŋ 「きらめく・きらきらひかる」
 ġlag (露)「つゆ・さらす・あらわれる」 ↔ laklak 「露出している・さらけだしている」
 ġlɔk (轆)「ひく・ごろごろふみくだく」 } ↔ { ġaliŋ 「ころがる」
 ŋlak (攪)「うつ・たたいてくだく」 } ↔ { ġiliŋ 「ころがる・ひいて粉にする」
 klög (攪)「ひきしめる・もつれる」 ↔ qulik 「混乱・紛糾」

xlag (廬) 「つば・くろい・ひとみ」 ↔ $\begin{cases} \text{garuŋ} \text{ 「容器・入れ物」} \\ \text{qiraŋ} \text{ 「暗い色・黒ずんでいる」} \end{cases}$

2.1.8. ŋād (厓) や kat (割) と同源の南島祖語

ここに示すのは語頭子音が g・k・ŋ などて語末子音が d・t の古代中国語に対応する南島祖語であるが、その数は少ない。ちなみに、古代中国語の x や・などの喉音は k や g などの牙音が弱まった音である。

giat (竭) 「つきる・つくす」 ↔ gasgas 「使い古している・使いつくしている」
 ŋād (厓) 「がけ」 ↔ gaDgaD 「くずれる」
 $\begin{cases} \text{kat (割) 「わる・さく」} \\ \text{kuāt (刮) 「けずる」} \\ \text{fiāt (絜) 「きざむ」} \\ \text{ŋāt (齧) 「かむ」} \end{cases} \leftrightarrow \begin{cases} \text{kiskis 「けずりとる」} \\ \text{gas 「われている・こわれている」} \\ \text{gitgit 「かみきる」} \\ \text{gutgut 「すこしずつかじる」} \\ \text{ŋatŋat 「かじる」} \\ \text{ŋətŋət 「歯ざしりする」} \end{cases}$
 $\begin{cases} \text{ket (結) 「むすぶ・ゆう・むすび」} \\ \text{kiet・ket (拮) 「しめる・ひきしめる」} \end{cases} \leftrightarrow \text{kətkət 「しっかりつかまっている」}$
 khiəd (汽) 「ゆげ」 ↔ kukut 「(水) 蒸気・ゆげ」
 khiuət (屈) 「かがむ・まげる」 ↔ kukut 「関節」
 xuađ (喙) 「くちばし・人の口先」 ↔ ŋu[s]uh 「くちびる」
 ・iet (一) 「ひとつ・ひとつにする」 ↔ qisah 「ひとつ・かぞえる」

2.1.9. mier (瀾) や piuər (飛) と同源の南島祖語

ここで取りあげるのは、語頭子音が m・m̥・p・p^h、語末子音が r の古代中国語、および語頭子音が pl という二重子音で語末子音が k の古代中国語に対応する南島祖語である。該当する語はわずかしかない。なお唇音の p・b・m はたがいによく似た音であり、これらの間ではしばしば交替が生じる。

mier (瀾) 「はびこる・広くいきわたる」 ↔ pəlpəl 「一杯にする・みたく」
 $\begin{cases} \text{m̥uər (火) 「ひ」} \\ \text{m̥iuər (燬) 「やく」} \end{cases} \leftrightarrow \begin{cases} \text{[q]urub 「もえる・もやす」} \\ \text{ñala 「ほのお・火災」} \end{cases}$
 $\begin{cases} \text{piuər (飛) 「とぶ・とばす」} \\ \text{puar (播) 「まく・まきちらす・ちる」} \end{cases} \leftrightarrow \begin{cases} \text{mirmir 「はねかける・水をまく」} \\ \text{pirpir 「はねかける・水をまく」} \\ \text{pulpul 「葉をおとす」} \end{cases}$
 p^her 「うつ・ふれる」 ↔ paluh 「うつ・たたく」
 $\text{plūk (剥) 「はぐ・むく・はげる」} \leftrightarrow \begin{cases} \text{palpal 「脱毛する・はげている」} \\ \text{bakbak 「樹皮をはぐ」} \\ \text{bəbak 「(動物の) 皮をはぐ」} \end{cases}$

2.2. 二つの語根を含む南島祖語

ここまでは1種類の語根が1語を構成している南島語の語源を追究してきたが、今から取りあげようとするのは2種類の語根が1語を構成している南島祖語である。中国語では「1語根=1語」が基本であるから、次のように古代中国語の少なくとも2語と南島祖語1語との比較を行うことになる。

giəm (紵) 「おび・えり」	↔	gənDit 「おび・ベルト・バンド」
tad (帶) 「おび・おびる」	↔	
fiəp (合) 「あう・あわせる」	↔	kampuŋ 「あつめること・集合」
phog (包) 「つつむ・おおう」	↔	
khəd (氣) 「のどから出るいき・気体」	↔	kəsaq 「大きく声を出していきをする」
khəd (嘅) 「口からほつといきをはく」		
siək (息) 「いき・いきをする・いこう」		
ləp (拉) 「くたく」	↔	rəmpak 「こまかくくだけの・こまかくくたく」
puəg (培) 「くたく」	↔	
heŋ (令) 「おつけ・いいつけ」	↔	[r]intaŋ 「命じる・命令する」
tiog (詔) 「みことのり・つげる」	↔	
phiām (汜) 「ひろがる・あふれる・ひろい」	↔	bi(n)daŋ 「ひろい」
thiaŋ (敞) 「ひろびろとしている・ひらく」	↔	

このように二つの語根によって構成される南島祖語は歴史的にはすべて複合語ということになるのだが、今では複合語であることがしばしば分かりにくくなっている。音の消失が起こったからである。上に示した kəsaq や bi(n)daŋ のように、複合語 $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ の C_2 は脱落することが珍しくない。次はそういう例である。

fiəp (合) 「あう・一つにあわせる」	↔	kə(m)pit 「一つにあわせる・はさむ」
miət (密) 「ひそか・すきまがない」	↔	
tier (脂) 「あぶら」	↔	[t]abə[q] 「脂肪分がおおい・ふとっている」
bāŋ (膨) 「ふくれる」	↔	
tuət (紂) 「ぬう・かがむ」	↔	dəkuŋ 「かがむ」
kʰiūk (曲) 「まがる・まげる」	↔	
tuan (端) 「はし」	↔	səruk 「かど・すみ」
ləŋ (稜) 「かど」	↔	
thar (挖) 「ひく・ひっぱる」	↔	cabut 「ひきぬく・むしる」
bat (拔) 「ぬく・ぬける」	↔	

音の消失が起こるのは、もちろん C_2 の部分だけではない。上の [t]abə[q] から分かるように、語頭音や語末音が失われることもあった。次の例では、二重子音である C_1 の一部が脱落している。

g̃lag (路) 「みち・すじみち」	↔	lan̄cuŋ 「散歩する」
dök (迪) 「みち・すすむ」	↔	
g̃lak (絡) 「からむ・からます・つなぐ」	↔	li(ŋ)kə[r] 「からむ・まわる・めぐる」
fiuər (回) 「まわる・まわす・めぐる」	↔	
ŋ̃hak (擲) 「うつ・むちうつ」	↔	lantak 「うつ・なぐる・たたく・うちこむ」
teŋ (打) 「うつ・うちたたく」	↔	

さらに次の場合には C_1 の一部と C_2 とが消失しているように思われるが、これほどの消失が起こると語源の追究がむずかしくなる。

plūk (剥) 「はぐ・はげる」	↔	buTak 「はげている」
thuk (禿) 「はげ・はげる」	↔	

以下に示す対応関係の一覧からは、このように同源であるかどうか疑わしい例は除外されている。

2.2.1. 前項が bāk (舶) や muan (滿) と同源の南島祖語

南島祖語の複合語はもともと $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ という語構成を有していたはずだが、ここに示す南島祖語はその C_1 が古代中国語の $b \cdot m \cdot m̐ \cdot p \cdot p^h$ に対応し、 C_2 が古代中国語の $g \cdot k \cdot ŋ \cdot n$ の音に対応する語である。

bāk (舶) 「ふね」	↔	waŋkan 「ふね・カヌー」
fiaŋ (航) 「ふね」	↔	
bag (歩) 「あるく・あゆむ」	↔	pizak 「あゆむ」
dag (徒) 「一步一步とあるく」	↔	
bieg (埤) 「ひめがき・城壁上の土べい」	↔	pagə[r] 「かき・かこい・棚」
fiuər (圀) 「ぐるりと周囲をかこむ・かこみ」	↔	
bien (頻) 「しきりに」	↔	pa(n)tuk 「ついばむ・つつく」
tūk (啄) 「ついばむ」	↔	
bög (炮) 「あぶる」	↔	paŋgaŋ 「あぶる」
xuŋ (烘) 「あぶる」	↔	
buan (搬) 「はこぶ・うつす」	↔	pinDak 「場所をうつす・ひっこす」
thiug (輸) 「うつす・はこぶ」	↔	
būŋ (棒) 「ぼう」	↔	pasək 「くい (杭)」
diək (杙) 「くい」	↔	
maŋ (莽) 「くさ・くさぶかい野」	↔	pa(n)dag 「草地・草原・草原地帯」
diäg (野) 「の・ひろくのびた大地」	↔	
mek (糸) 「蚕のまゆからとった細い原糸」	↔	bənaŋ 「いと」
fiuen (弦) 「弓のつる・楽器にはったいと」	↔	
meŋ (膜) 「くらい・かすか」	↔	bintaŋ 「ほし (星)」
diəŋ (曜) 「かがやく・ひかり」	↔	

muăn (挽) 「ひく・ひっぱる」	↔	batək 「ひく・ひきずる・曳航する」
thiog (抽) 「ひく・ぬく・ぬきとる」	↔	
muk (木) 「き」	↔	batəŋ 「木の幹・樹幹・根株」
tug (株) 「かぶ」	↔	
muan (満) 「みちる・みたす」	↔	pasəŋ 「満潮」
dioŋ (潮) 「朝しお・うしお」	↔	
diak (汐) 「夕しお・うしお」	↔	
muan (曼) 「ながい・ながびく」	↔	pañzan 「ながい」
tiaŋ (長) 「ながい・ながさ」	↔	
məŋ (海) 「うみ」	↔	pasir 「うみずな (海砂)」
sār (砂) 「すな」	↔	
məŋ (海) 「うみ」	↔	muwa[r]ah 「河口」
piuər (扉) 「とびら」	↔	
piaŋ (放) 「はなつ」	↔	bantiŋ 「放りなげる」
dug (投) 「なげる」	↔	
piuən (分) 「わける・わかれる」	↔	bə(ŋ)kaŋ 「分裂・相克」
gieŋ (岐) 「えだみち・わかれる」	↔	
pög (包) 「つつむ・つつみ」	↔	bəkət 「つつみ・たば (束)」
tʰog (套) 「つつむ・つつみ」	↔	
puan (半) 「なかば・半分」	↔	məntaŋ 「熟していない・半熟の」
dhiok (熟) 「にる・にえる・うれる」	↔	
phăn (攀) 「よじる・そる・そらす」	↔	pin[t]al 「よりあわせる」
tsʰar (搓) 「よりあわせる・こする」	↔	
phuăn (翻) 「ひるがえす」	↔	ha(m)bur 「まく・まきちらす」
puar (播) 「まく・まきちらす」	↔	
phuŋ (峰) 「みね・山のいただき」	↔	pucuk 「山のいただき・山頂」
teŋ (頂) 「いただき・てっぺん」	↔	
phög (包) 「つつむ・つつみ」	↔	bakul 「かご」
bög (匏) 「ひさご・ふくべ」	↔	
kuar (裏) 「つつむ・つつみ」	↔	
fier (匚) 「おおいかくす」	↔	
phog (包) 「つつむ・つつみ」	↔	piŋgan 「深皿・鉢・ボウル」
fiəm (含) 「ふくむ・つつみもつ」	↔	
phuəŋ (剖) 「さく・さける・わかれる」	↔	bəDak 「わる・さく」
tʰak (析) 「さく・さける・ひらく」	↔	
phuən (噴) 「ふく」	↔	paŋcu[r] 「ふきでる水・噴出する水」
thiuər (水) 「みず」	↔	

2.2.2. 前項が bat (拔) や pʰiet (匹) と同源の南島祖語

ここにあげる南島祖語は、本来の $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ における C_1 が古代中国語の $b \cdot m \cdot p$ の音に対応し、 C_2 が古代中国語の $d \cdot t$ の音に対応するいくつかの語である。

bat (抜) 「ぬく・ぬぎとる」	↔	puTik 「つむ・つみとる」
ték (摘) 「つむ・とる」	↔	
miat (滅) 「ほろぼす・ほろぶ・火をけす」	↔	padəm 「(火・文字などを) けす」
tsām (斬) 「きる・たつ・たえる・うつ」	↔	
piet・pied (泌) 「汁がでる・汁をだす」	↔	{ basaq 「ぬれている」
dzūk (泥) 「(水に) ぬれる・ぬらす」	↔	{ basuq 「あらう」
dzieg (漬) 「(水に) ひたす・つける」	↔	
p ^h iet (匹) 「たぐい・一対のもの」	↔	
p ^h iet (疋) 「対になる・ペアになる」	↔	
sūŋ (双) 「ふたつ・一組・ならぶ」	↔	pasarŋ 「一組・対をなすもの」
puat (撥) 「はねる・はねあがる」	↔	pitik 「はねあがる・はじきとばす」
dög (跳) 「はねる・とびはねる」	↔	
phuađ (肺) 「はい・肺臓」	↔	pusuq 「心臓・ころろ・双葉」
dzaŋ (臓) 「はらわた・臓器」	↔	

2.2.3. 前項が dug (頭) や thiog (手) と同源の南島祖語

ここに示す南島祖語は、本来の $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ における C_1 が古代中国語の $d \cdot dh \cdot dz \cdot d \cdot s \cdot t \cdot t^h \cdot th \cdot ts \cdot ts^h$ の音と対応し、 C_2 が古代中国語の $g \cdot k \cdot ŋ \cdot n$ と対応する語である。このような語は非常に多い。

dan (弾) 「うつ・はじく」	↔	təmbak 「うつ・射る・狙いをさだめる」
p ^h uk (扑) 「うつ・たたく」	↔	
deg (締) 「しめる・むすぶ」	↔	ca(ŋ)kup 「ぱたん (かちつ) としめる」
kab (蓋) 「おお・ふた」	↔	
deg (締) 「しめる・むすぶ」	↔	saŋkut 「(鍵・ホックを) かける・固定する」
ket (結) 「むすぶ・ゆう」	↔	
diaŋ (杖) 「つえ・つえをつく」	↔	[t]u(ŋ)kəd 「つえ・棒・支柱」
guăd (拐) 「かどわかす・つえ」	↔	
dien (塵) 「ちり」	↔	Dabuk 「はい・ほこり・ちり」
muəg (灰) 「はい」	↔	
diuəŋ (船) 「ふね」	↔	tampan 「ふね・船舶」
băk (舶) 「ふね」	↔	
diuəŋ (船) 「ふね」	↔	zu(ŋ)kuŋ 「丸木舟」
fiaŋ (航) 「ふね」	↔	
dog (盗) 「ぬすむ・ぬすみ」	↔	[t]a(ŋ)kaw 「ぬすみ・窃盗」
giəm (摘) 「とらえる・とりこ」	↔	
dög (条) 「えだ・すじ」	↔	cagak 「ささえ・支柱」
kieg (支) 「えだ・ささえ」	↔	
dög (条) 「えだ・すじ」	↔	cabaŋ 「分岐 (点)」
p ^h ég (派) 「わかれ・わかれる」	↔	

duan (断) 「たつ・たちきる」	↔	[t]əbas 「切りたおす・伐採する」
biuāt (伐) 「きる・うつ」	↔	
duan (断) 「たつ・たちきる」	↔	təbaŋ 「切りたおす・伐採する」
buək (踏) 「たおれる・たおす」	↔	
duan (段) 「きざはし・だん」	↔	taŋgah 「はしご・階段」
ker (階) 「きざはし・はしご」	↔	
dug (頭) 「あたま・かしら」	↔	tudun 「かぶりもの・帽子・頭巾」
dzaŋ (蔵) 「かくす・かくれる」	↔	
dug (頭) 「あたま・かしら」	↔	suŋkuk 「かぶりもの・帽子・頭巾」
kɪən (巾) 「きれ・布きれ」	↔	
dug (頭) 「あたま・かしら」	↔	suqun 「荷を頭にのせてはこぶ」
fiuən (運) 「めぐる・はこぶ」	↔	
dhian (繕) 「つくろう・なおす」	↔	tambal 「強化する・修繕する」
phian (変) 「かわる・かえる」	↔	
dhiaŋ (上) 「うえ」	↔	[t]iŋDaq 「みあげる」
tag (賭) 「みる」	↔	
dhiaŋ (上) 「うえ」	↔	ti(n)diq 「上にある・上におかれている」
tiəg (置) 「おく」	↔	
dzəg (裁) 「たつ・きる」	↔	zu(ŋ)kit 「切りこむ・切れ目をいれる」
kat (割) 「わる・さく」	↔	
dzaŋ (蔵) 「かくす・かくれる」	↔	ta(ŋ)kub 「かぶせる・おおう」
kab (蓋) 「おおう・ふた」	↔	
ɖiəg (似) 「にる・ごとし」	↔	tula[dD] 「にている」
huəd (類) 「たぐい・にる」	↔	
ɖiag (斜) 「ななめ・かたむく」	↔	sanDar 「ななめによりかかっている」
ther (梯) 「はしご・よりかかる」	↔	
ɖiəg (曜) 「かがやく・ひかり」	↔	siŋar 「あかるい」
xuər (輝) 「てる・かがやかしい」	↔	
ɖiuan (施) 「めぐる・めぐらす」	↔	zuŋkuk 「まがる・湾曲する」
kʰiūk (曲) 「まがる・まげる」	↔	
san (散) 「ちる・ばらまく」	↔	sa(m)bur 「まく・まきちらす」
puar (播) 「まく・まきちらす」	↔	
tiəŋ (拵) 「すくう」	↔	ca(ŋ)gap 「すくいとる」
kɪəp (汲) 「くむ」	↔	
tiuən (準) 「はかる・なぞらえる」	↔	simp[aə]n 「準備する」
bruəg (備) 「そなえる・そなわる」	↔	
tiuŋ (踵) 「くびす・かかと」	↔	caŋkul 「かかと」
fiuār (踝) 「くびす・くるぶし」	↔	
tuan (端) 「はし」	↔	səruk 「かど・すみ」
ləŋ (稜) 「かど」	↔	

tuan (端) 「はし」	↔	tə(m)biŋ 「ふち・きし」
pān (辺) 「へり」	↔	
tʰian (闢) 「ひらく・あけすけな」	↔	[t]ə(m)bak 「森を切りひらく」
biek (闢) 「ひらく・土地をひらく」	↔	
tʰiuŋ (充) 「みちる・みたく・あてる」	↔	cukup 「十分である」
kɪəp (給) 「たりる・たす・あたえる」	↔	
thien (伸) 「のびる」	↔	tu(m)buq 「そだつ・のびる・生長する」
bāŋ (彭) 「ふくれる」	↔	
thiog (手) 「て・てにする」	↔	dakəp 「だく・抱擁する」
kab (蓋) 「おお・ふた」	↔	
thiog (手) 「て・てにする」	↔	saŋkal 「え (柄)」
kar (柯) 「え (柄)・えだ」	↔	
thiog (手) 「て・てにする」	↔	tu(ŋ)kaŋ 「手工業者・職人」
kuŋ (工) 「わざ・たくみ」	↔	
thiog (手) 「て・てにする」	↔	təpak 「(手で) うつ・たたく・なぐる」
phuk (扑) 「うつ・たたく」	↔	
thiog (守) 「まもる・まもり」	↔	saŋgaq 「身をまもる・体をささえる・すがる」
fiuag (護) 「まもる・まもり」	↔	
tsag (組) 「くみあわせる」	↔	Dakap 「くみあわせる」
fiəp (合) 「あう・あわせる」	↔	
tsāk (窄) 「せまい・せばめる」	↔	sikəp 「せまい」
fiāp (狭) 「せまい・せばめる」	↔	
tsog (抓) 「つまむ・つかむ」	↔	taŋgap 「つかむ・にぎる」
giəm (擒) 「とらえる・とりこ」	↔	
tsiuk (足) 「あし・たりる」	↔	zagzag 「あしを強くしぼる」
deg (締) 「しめる・むすぶ」	↔	
tsiag (阻) 「けわしい」	↔	tunɣul 「つき出ている・そびえている・方形旗」
ŋar (峨) 「けわしい」	↔	
tsʰiek (刺) 「さす・とげ」	↔	saqaŋ 「刺激の強い味がする」
kɪog (臭) 「におう・くさい」	↔	

2.2.4. 前項が dəp (沓) や tam (担) と同源の南島祖語

ここに示す南島祖語は本来の $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ における C_1 が古代中国語の $d \cdot dz \cdot t \cdot s$ に対応し、 C_2 が古代中国語の $m \cdot p$ に対応するいくつかの語である。

dəp (沓) 「かさなる・かさねる」	↔	tumpan 「つみあげる・つみかさねる・つみこむ」
piok (複) 「かさなる・かさねる」	↔	
dziəp (集) 「あつまる・あつめる」	↔	sapiq 「一つにまとめる・統合する」
fiəp (合) 「あう・一つにあわせる」	↔	
siəm (心) 「心臓・こころ」	↔	zantuŋ 「心臓・こころ」
dzaŋ (臓) 「はらわた・臓器」	↔	

tam (担) 「になう・肩にかつぐ」	↔	sanDaŋ 「肩にかついではこぶ」
tuan (転) 「ころがる・はこぶ」	↔	
tam (担) 「になう・肩にかつぐ」	↔	timpuq 「せおう」
biuəg (負) 「おう・せおう・まける」	↔	
tʰəp (踏) 「ふむ」	↔	dupak 「(どしどし・ずしずしと) ふみつける」
diəg (踏) 「ふむ」	↔	
tsām (斬) 「きる・きれめをつける」	↔	zu(ŋ)kit 「きりこむ・刻みをつける」
kuát (刮) 「けずる・小刀でえぐる」	↔	

2.2.5. 前項が gion (窮) や kuan (広) と同源の南島祖語

ここに示す南島祖語は、本来の $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ における C_1 が古代中国語の $g \cdot k \cdot \eta$ などの音に対応し、 C_2 が古代中国語の $g \cdot \eta \cdot n$ の音に対応する語である。

gion (窮) 「きわまる・きわまり」	↔	gu[t]əm 「窮乏する・飢えにくるしむ」
giəm (尋) 「たずねる・もとめる」	↔	
gian (象) 「ゾウ」	↔	gadiŋ 「象牙」
tʰiəg (齒) 「は」	↔	
kien (緊) 「きつい・ひきしめる」	↔	kəŋcəŋ 「ぴんとはっている」
tian (張) 「はる・はりわたす」	↔	
kuan (広) 「ひろい・ひろがる」	↔	ka(m)baŋ 「ふくらむ・(花・蕾が) ひらく」
bāŋ (膨) 「ふくらむ・ふくれる」	↔	
kuan (光) 「ひかる・ひかり」	↔	[qlintaŋ 「ほし (星)」
thiam (閃) 「きらめく・閃光」	↔	
kuəg (掛) 「かける・かかる」	↔	gantui 「かける・かかる」
tög (吊) 「つる・つるす」	↔	
kʰuan (筐) 「かご」	↔	kanTuŋ 「かご・ポケット」
dəg (袋) 「ふくろ」	↔	
kʰuən (梱) 「ひきしめてしぼる」	↔	gəntiŋ 「ひもでしぼる・しめつける」
deg (締) 「ひもでしめくくる」	↔	
ŋān (研) 「みがく・する」	↔	ka(ŋ)caŋ 「みがきあげる」
tūk (琢) 「みがく・たたく」	↔	
fiuag (雨) 「あめ」	↔	qudan 「あめ (雨)」
tam (沾) 「うるおす」	↔	
fiuan (緩) 「ゆるい・ゆるめる」	↔	kəndur 「ゆるんでいる」
dhiuar (垂) 「たれる・たらす」	↔	
xān (顕) 「あらわ・あらわれる」	↔	guDaŋ 「うまれている・生じている」
ɬak (著) 「あらわす・あらわれる」	↔	
·ian (央) 「なかば・まんなか」	↔	qa(n)taq 「なまである・熟していない」
dhiok (熟) 「にる・にえる・うれる」	↔	
·uan (腕) 「うで」	↔	gələŋ 「腕輪」
luən (輪) 「わ」	↔	

$\begin{array}{l} \cdot \text{ug (嘔)} \text{「はく」} \\ \text{t}^{\text{h}}\text{ag (吐)} \text{「はく」} \end{array} \begin{array}{l} \nearrow \\ \nwarrow \end{array} \begin{array}{l} [\text{q}]\text{u}[\text{n}]\text{taq} \text{「はく」} \end{array}$

ここまでに見てきたように、南島祖語は古代中国語とよく似ている。酷似していると言ってもよい。特に上の 2.2.1. ~ 2.2.5. で示したように、古代中国語の「半熟」「噴水」「肺臓」「塵灰」「船舶」「頭巾」「準備」「守護」「組合」「集合」「心臓」「窮尋」「緊張」「顕著」といったいわば熟語表現と同源の南島祖語が存在するという事実は、南島語と中国語が同系言語以上の関係にあることを物語っている。先史中国語話者が南島祖語話者になっていったからこそこういう対応関係が生まれたのであろう。

3. 南島祖語の音変化

ここまで、同源と見なされる古代中国語と南島祖語の組みあわせを数多くあげてきた。二つの言語が無縁であつたら、これほどの似通いは存在しない。両言語の間に際立った言語接触があつた形跡はないので、その類似性は系統的なものであると見てよい。

古代中国語は、語形あるいは語の発音だけに関して言えば、現代中国語とよりも南島祖語とよく似ている。現代中国語は C_1VC_2 という本来の語構造の C_2 にあたる音を大多数の語において失ってしまい、その代償として四声と呼ばれる 4 種類のイントネーションを発達させている。したがって、南島祖語を現代中国語と比較してみたところでほとんど何の関係性も発見されない。一方、南島祖語は C_1VC_2 という語構造を残しながら、他方で $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$ という構造を基本とするきわめて多数の畳語あるいは複合語をつくった。この畳語と複合語にこそ、 C_1VC_2 という原初的構造が顕著に観察されるのである。

ざっくりと言えばこういうことなのだが、細部に関しては詰めが足りない。同源の組みあわせであるはずの古代中国語と南島祖語がそのうわべにおいて非常にしばしば似ていないという現実に出くわすからである。どうしてこういうことになるのか。この疑問は、台湾に渡った先史中国語が次のような音変化をこうむったと仮定することによってしか説明できないように思われる。

$\begin{array}{l} \text{k} \cdot \text{g} \cdot \text{ŋ} \cdot \text{ŋ} \text{ など} \end{array} \begin{array}{l} \nearrow \\ \longrightarrow \\ \searrow \end{array} \begin{array}{l} \text{h} \cdot \text{y} \cdot \text{w} \cdot \text{j} \\ \text{p} \cdot \text{b} \cdot \text{m} \\ \text{l} \cdot \text{r} \end{array}$

 $\text{t} \cdot \text{d} \cdot \text{ts} \cdot \text{dz} \text{ など} \longrightarrow \text{l} \cdot \text{r}$

以下において行おうとするのは、このような音変化が南島祖語で起こったと仮定したうえでの、古代中国語と南島祖語の同源の語の比較である。

3.1. 牙音や喉音と h・y・w・j との対応

中国語の k・g・ŋ などの牙音は調音の仕方がゆるむと、舌音の n や喉音の ŋ の音に変わる。そしてさらに、h・y・w・j の音にも変わりうる。すでに論じたように、この種の音変化は日本語でも起こった。なお、南島祖語では牙音や喉音が w・j の音となるのはきわめて稀である。

以下に示すように、牙音・喉音の h・y・w・j 音への変化は語頭・語中・語末のいずれでも起きている。

bəŋ (憑) 「よりかかる・たのむ」	↔	pin[t]ah 「たのむ」
dhiəŋ (恃) 「たのむ・あてにする」	↔	
buag (輔) 「たすける・たすけ」	↔	bəntuh 「たすける・援助する」
dziag (助) 「たすける・たすけ」	↔	
buaŋ (房) 「へや・いえ」	↔	balay 「いえ・小屋」
hag (廬) 「いおり・いえ」	↔	
buan (磐) 「いわ」	↔	batuh 「いし」
dhiak (石) 「いし」	↔	
dag (徒) 「一步一步とあるく」	↔	taytay 「(おちついた足取りで) あるく」
dier (稚) 「おさない」	↔	dayaŋ 「おとめ・少女」
niag (女) 「おんな」	↔	
dög (調) 「しらべる」	↔	zawzaw 「しらべる・検査する」
dzăg (査) 「しらべる」	↔	
dzan (残) 「のこる・のこす・のこり」	↔	sayan 「残念におもう」
nem (念) 「おもう・深くかみしめる」	↔	
gəg (期) 「日時・まつ」	}	hantay 「まつ」
fiug (候) 「うかがう・まつ」		
dəg (待) 「まつ・あしらう」		
ġlan (欄) 「手すり・かこい・わく・区切り」	↔	laŋsay 「カーテン・幕」
tiaŋ (帳) 「とばり・上からたらしした幕」	↔	
ŋān (研) 「みがく・する」	↔	ha(n)saq 「みがく・とぐ」
tūk (琢) 「みがく・たたく」	↔	
kab (蓋) 「おお・ふた」	↔	habsa[q] 「蓄積・堆積」
dzaŋ (積) 「つむ・つもる」	↔	
kan (肝) 「きも・こころ」	↔	hatay 「肝臓・こころ」
dzaŋ (臓) 「はらわた・臓器」	↔	
kăp (甲) 「かぶと・よろい」	↔	hu(n)Daŋ 「甲殻類」
diog (胃) 「かぶと・よろい」	↔	
kar (歌) 「うた・うたう」	↔	hi[r]a[q] 「うたう」
kār (加) 「くわえる・くわわる」	↔	hubuŋ 「つけくわえる」
biug (附) 「つく・くつつける」	↔	

ker (計) 「かぞえる・はかる」	↔	hituŋ 「かぞえる」
suan (算) 「かぞえる・めど」	↔	
kuəŋ (愧) 「はじる・はじ」	↔	hilah 「はじ・恥辱」
kiuen (均) 「ひとしい・ととのう」	↔	
dzer (斉) 「ととのう・ひとしい」	↔	hatul 「ととのえる」
kueŋ (門) 「さかい・はるか」	↔	hiŋgah 「さかい」
k ^h iar (敲) 「かたむく・かたむける」	↔	hiliŋ 「かたむける」
k ^h ug (叩) 「こつこつとたたく」	↔	
tūk (琢) 「みがく・たたく」	↔	hən[t]ak 「(とんとんと軽く) たたく」
fiəp (合) 「あう・一つにあわせる」	↔	
miət (密) 「ひそか・すきまがない」	↔	ha(m)pit 「一つにまとめられている」
fiuaŋ (皇) 「きみ・かみ・おおきい」	↔	hi[y]aŋ 「かみ・神性・神々しい」
fiuən (運) 「めぐる・めぐらす・はこぶ」	↔	
tad (帶) 「おび・おびる・ひきつれる」	↔	ha[n]tad 「とどける・もっていく」
fiuan (完) 「まったし・おわる」	↔	
tsiuət (卒) 「おわる・おえる」	↔	hən[t]ih 「やむ・おわる・やめる」
・uən (温) 「あたたか・あたたかい」	↔	
k ^h əd (氣) 「のどから出るいき」	↔	haŋət 「あたたかい息吹」
laŋ (廊) 「廊下・回廊」	↔	
dziəŋ (床) 「とこ・ゆか」	↔	lantay 「床張り建材・廊下」
miaŋ (望) 「のぞむ」	↔	piya[h] 「熱望する」
miəŋ (亡) 「ほろぶ・なくなる」	↔	
fiəg (骸) 「むくろ・なきがら」	↔	baŋkay 「なきがら (亡骸)」
pəŋ (綱) 「まく・まきつける」	↔	bəjbaj 「まく・まきつける」
piuag (夫) 「おとこ・おっと」	↔	puh 「男の人・紳士」
phōg (泡) 「あわ」	↔	bua[h] 「あわ」
t ^h iəg (嗤) 「わらう・わらい」	↔	[t]awah 「わらう」
ts ^h ək (策) 「はかりごと」	↔	daya 「策略・狡猾さ」

3.2. 牙音や喉音と p・b・m との対応

k・g・ŋ・fiなどの牙音や喉音、また舌音のnがh・w・yなどの音に変わるというのは、「発音のゆるみ」ということを考慮すれば、きわめて自然な変化であると理解されよう。実際、多くの言語の歴史の中でそういう変化は起こっている。一方k・g・ŋ・fi・nなどの音がp・b・mの音に変わるというのは、次のように逆行同化を起こす場合は別にして、ありそうにない変化であると思われるかもしれない。

dzaŋ (蔵) 「かくす・かくれる」	↔	
mak (幕) 「おおい布・おおう」	↔	ta(m)bəŋ 「おおいかくされている」

kuan (広)「ひろい・ひろまる・ひろげる」
 miēr (弥)「あまねし・いきわたっている」
 fiäg (下)「した」
 piuk (腹)「はら」

↗ hampa[r]「ひろげる」
 ↖
 ↗ kəmpuŋ「下腹部」
 ↖

しかし k・g・ŋ・fi・n などの音が h の音に変わり、これが唇音化して p・b・m になったと考えれば、不自然には思われまい。実際、牙音の唇音化は牙音→喉音→唇音という過程を経たものと推定される。ちなみに、こういう変化は日本語でも珍しくない。たとえば古代日本語の φoφo (頬) という語は語頭音が k → φ という変化をこうむった語であり、munasi (空し・虚し) という語は語頭音が k^h → φ → m という変化をこうむった語であると考えられる。そしてこれらは、次に示す古代中国語と南島祖語の組みあわせと同源であると見なされる。

kāp (頬)「ほお」 ↔ pipih「ほお」
 k'uŋ (空)「から・むなししい・そら」 ↔ buŋbuŋ「からである・あし(葦)」

なお、古代中国語の牙音や喉音と南島祖語の p・b・m との対応は、下に示すように語頭・語中・語末のいずれでも観察される。

dhiap (拾)「ひろう」
 fiet (擷)「つむ・つかむ」

↗ zəmpuŋ「(指で) つまむ」
 ↖ zu(m)puŋ「(指で) つまむ」
 ↖ za(bat)「つかむ」

dog (道)「みち」
 p^hēg (派)「わかれ」

↗ tampaŋ「枝道・脇道・道の分岐」
 ↖

dzəŋ (蔵)「かくす・かくれる」 ↔ tutup「おおう」

dziuən (吮)「すう」 ↔ { səpsəp「すう」
 dibdi「すう」

dziəŋ (状)「すがた・かたち」 ↔ tə(m)pah「かたち・外形」

gvan (拳)「こぶし・げんこつ」 ↔ gəmgəm「にぎりこぶしをつくる」

ŋlök (樂)「たのしむ・たのしい・たのしみ」 ↔ kaləp「すぎである」

k^hēr (揩)「ぬぐう」 ↔ buri[h]「ぬぐう・ふく」

k^hiūk (曲)「まがる」
 ・uaŋ (尤)「まがる」

↗ buŋkuk「まがっている」
 ↖ bə(ŋ)kuŋ「弓形になる・湾曲する」

fiäg (下)「した」
 dag (肚)「はら」

↗ bə(n)təŋ「下腹部」
 ↖

fiet (擷)「つむ・つかむ・はさむ」 ↔ bitbit「つむ・つかむ」

fiuən (暈)「かさ・まるい光の輪」 ↔ payuŋ「かさ」

fiuən (運)「めぐる・めぐらす・はこぶ」
 fiuən (環)「たまき・わ・めぐる・まわる」

↗ kəpuŋ「まわる・めぐる」
 ↖

fiuən (渾)「にごる・にごす」
 dük (濁)「にごる・にごす」

↗ buTak「にごっている」
 ↖

- dök (笛) 「ふえ」 ↔ tulin 「ふえ」
 duŋ (筒) 「つつ」 ↔ turuŋ 「筒状である」
 dziəg (字) 「文字」 ↔ $\begin{cases} \text{surat} \text{ 「文字」} \\ \text{tulis} \text{ 「文字」} \end{cases}$
 ðiak (液) 「液体」 ↔ duruq 「液体」
 ðiug (愉) 「たのしい・たのしむ」 ↔ dulah 「たのしむ」
 ðiuŋ (踊) 「おどる」 ↔ [t]arih 「おどる」
 ŋiák (逆) 「さからう・さかさま」 ↔ galgal 「反する・さからう」
 kǎŋ (更) 「あらためる・かえる・かわる」 ↔ lakuh 「かえる・変化させる」
 kəg (改) 「あらためる・あらたまる」 ↔ $\begin{cases} \text{la(ŋ)cuŋ} \text{ 「歪曲する・改竄する」} \\ \text{tshuan} \text{ 「もぐりこむ・のがれる」} \end{cases}$
 kəŋ (絃) 「はる・弦をぴんとはる」 ↔ $\begin{cases} \text{rə(n)[t]əŋ} \text{ 「はる」} \\ \text{tiaŋ} \text{ 「はる・ぴんとのびる」} \end{cases}$
 kiəm (禁) 「ふさぐ・とどめる」 ↔ laraŋ 「禁じる・禁止する」
 kiéŋ (驚) 「おどろく・おどろかせる」 ↔ ləŋ[aə]ŋ 「おどろかせる」
 kiuan (捲) 「まく・ぐるぐるまく」 ↔ $\begin{cases} \text{lulun} \text{ 「まく」} \\ \text{lunlun} \text{ 「からみあわせる・むすびあわせる」} \end{cases}$
 kǒg (酵) 「こうじかび・酵母」 ↔ [r]agih 「酵母・イースト」
 kuěg (掛) 「かける・かかる」 ↔ rayray 「かけてある・かかっている」
 kʰuat (闊) 「ひろい・はるか・ゆるい」 ↔ ladlad 「ひろがる」
 kʰuən (梱) 「ひきしめてしぼる」 ↔ $\begin{cases} \text{ra(ŋ)kit} \text{ 「たばねる・いかだ (筏)」} \\ \text{ket} \text{ 「むすぶ・ゆう・むすび」} \end{cases}$
 fiəŋ (脛) 「はぎ」 ↔ $\begin{cases} \text{lulud} \text{ 「脛骨」} \\ \text{fiuət} \text{ (骨) 「ほね」} \end{cases}$
 fiuǎŋ (永) 「ながい・とこしえ」 ↔ lahun 「持続・永続」
 fiuag (護) 「まもる・まもり」 ↔ $\begin{cases} \text{ru(ŋ)kub} \text{ 「保護・まもること」} \\ \text{kab} \text{ (蓋) 「おお・おい」} \end{cases}$
 fiuan (完) 「全部そろっている・まっとうする」 ↔ $\begin{cases} \text{lan̄kəp} \text{ 「完備している」} \\ \text{kiəp} \text{ (給) 「たりる・たす・あたえる・たまう」} \end{cases}$
 fiuan (換) 「かえる・かわる」 ↔ liyan 「かえる」
 fiuət (穴) 「あな・ほらあな」 ↔ $\begin{cases} \text{kaliŋ} \text{ 「(穴などを) ほる」} \\ \text{・ət} \text{ (控) 「ほる・あなをあける」} \end{cases}$
 fiug (後) 「のち・あと・うしろ」 ↔ $\begin{cases} \text{ləŋgak} \text{ 「うしろへまげる」} \\ \text{kʰūk} \text{ (曲) 「まがる・まげる」} \end{cases}$
 ・əm (暗) 「くらい・やみ」 ↔ rabh 「よる」
 meŋ (冥) 「くらい」 ↔ maləm 「よる」
 mǝg (買) 「かう」 ↔ bəlih 「かう」
 miǎn (敏) 「さとい」 ↔ $\begin{cases} \text{pintə[r]} \text{ 「利口な・かしこい」} \\ \text{tieg} \text{ (智) 「さとい」} \end{cases}$
 mog (茂) 「しげる」 ↔ buluŋ 「茂り」
 pəŋ (繃) 「まく・まきつける」 ↔ baliŋ 「まく・まきつける」

piak (碧) 「あおい・あお・みどり」 ↔ bi[r]u 「あおい」
 piuǎn (反) 「かえす・かえる」 ↔ banʔkal 「逆立つ」
 ɲiǎk (逆) 「さからう・さかさま」 ↔
 puəŋ (背) 「せ・せなか」 ↔ balakaŋ 「せ・せなか」
 kʰiǔk (曲) 「まがる・まげる」 ↔
 tʰiak (尺) 「指尺」 ↔ zə(ŋ)kal 「指尺」
 ɟiag (距) 「へだたる」 ↔
 tsʰiek (刺) 「さす・とげ」 ↔ { zuluk 「さす・つく」
 zuruh 「(とがった物の) さき・先端」
 xug (吼) 「ほえる」 ↔ luluŋ 「ほえる」

3.4. 舌音・歯音と l・r との対応

古代中国語の t・d などの舌音や ts・dz などの歯音が南島祖語の l・r と対応するというのも妙な現象であると思われるかもしれない。しかし前に指摘したように、古代中国語の語末の t・d は朝鮮語の l・r と対応する。また朝鮮語と日本語との間にも、たとえば bo:l 「ハチ」 ~ ɸati (蜂), mul 「みず」 ~ midu (水), bjöl 「ほし」 ~ ɸosi (星) のように l ~ t・s という音韻対応が観察される。舌音・歯音と l・r は調音点が似ているから両者の間に交替が起こっても不思議はないのである。

さて、古代中国語の舌音・歯音と南島祖語の l・r との音韻対応は、以下に示すように語頭部分で顕著である。

dieg (地) 「つち・大地・地面」 ↔ lindur 「地震」
 tien (震) 「ふるえる・ふるわす」 ↔
 diəŋ (澄) 「すむ・すます」 ↔ li[n]aw 「(水・空・色・音などが) すんでいる」
 diəm (沈) 「しずむ・しずめる」 ↔ ləbləb 「(水などが) あふれる・しずむ」
 diat (舌) 「した」 ↔ dilah 「した」
 duŋ (洞) 「ほら・ほらあな」 ↔ lihaŋ 「あな」
 dzān (前) 「まえ」 ↔ ləŋəŋ 「前腕」
 ・uan (腕) 「うで」 ↔
 dziəp (集) 「あつまる・あつめる」 ↔ ri(m)pun 「あつめる」
 daieŋ (静) 「しずか・しずめる・しずまる」 ↔ liŋaw 「しずかである」
 diəŋ (蠅) 「ハエ」 ↔ laŋaw 「大黒バエ・ハエ」
 diet (洩) 「あふれる」 ↔ zulzul 「あふれる」
 kʰet (契) 「きぎむ・ちぎる」 ↔ gəlgəl 「きぎむ」
 liaŋ (良) 「よい」 ↔ laba[r] 「よいあじ・美味」
 muəð (味) 「あじ」 ↔
 puāt (八) 「やつつ」 ↔ walu[h] 「八・やつつ」
 tiad (暫) 「あきらか・あかるい」 ↔ tarah 「あかるくなる・あかるい」

tiat (暫) 「あきらか・あかるい」	↔	tələn 「あかるい」
t ^h uən (焔) 「さかん・あかるい」	↔	
t ^h āk (拆) 「ひらく・さく」	↔	lu(ŋ)kat 「ひらいている」
xuat (豁) 「ひらく・ひらける」	↔	
t ^h am (添) 「そえる」	↔	samb[aə]l 「つけあわせ・そえもの」
muət (物) 「もの」	↔	
t ^h əm (探) 「さぐる・さがす」	↔	rabah 「さぐる・さぐりもとめる」
t ^h onj (統) 「すべる・すべて・全体で」	↔	raŋkap 「ひとつにまとめる・統合する」
fiəp (合) 「あう・一つにあわせる」	↔	
t ^h uəd (退) 「しりぞく・しりぞける」	↔	surad 「あとずさりする・干潮」
t ^h uər (唾) 「つば」	↔	luwaq 「つばをはく・はく」
·ug (嘔) 「はく」	↔	
thiaŋ (傷) 「きず・きずつく・きずつける」	↔	lu(ŋ)ka 「きずつける・きず」
thiog (手) 「て」	↔	{ liŋah 「て・うで」 lima 「て・いつつ」
tsiək (即) 「つく・くつつく」	↔	ləkət 「くつつく・付着する」
tsiəm (浸) 「しみる・ひたす」	↔	ləməs 「ひたす・水につける」
ts ^h ag (粗) 「あらい・密でない」	↔	[l]agah 「目のあらい」

上で見てきたように、本来は牙音や喉音であったものが部分的に h・y・w・j や p・b・m の音に変わった。また牙音や喉音、および舌音と歯音が l・r の音に変わることもあった。しかしどのような音声的環境の中でそういう変化が起き、どのような音声的環境の中でそれが起こらなかったかは不明である。

4. 南島語と日本語の系統的関係

日本語の起源説は大きく二つに分けられる。北方起源説と南方起源説である。北方起源説は日本語がアルタイ系言語と同系であると説く。ミラー (1982) の説はその典型と言ってよい。日本語とモンゴル語との同系性を唱える小沢 (1968, 1979) の説や、日本語は朝鮮語から分離したものであるという服部 (1959) や韓国の学者たちの説もこの類である。一方、南方起源説は日本語の起源を南太平洋の島々で話される南島語に求めている。大雑把に言うところのことなのだが、実際には北方の言語と南方の言語とがまざりあって日本語は成立したと見る向きが多い。

4.1. 南島語を取りまく学説

日本語の形成に南島語が関与したという考えを全面的に否定する人はほとんどいないが、

南島語がそのまま日本語になったと考える人もいない。見方はいろいろである。

日本語におよぼした南島語の影響を認めながら、それが語彙面に限られるとしているのは泉井（1975）である。泉井が考える日本語の系統は次の言葉に集約されている。

そして、その系統はやはり、奥地を含んで、北方的・大陸的なものであろう。日本語のなかに南島語的要素があるとすれば、それはこの構図の統一の下に潜む異系の要素の一つとみることができる。……過去においても現在においても、日本語が有する音韻・造語・形態・統辞法の細部の体系は、マライ＝ポリネシア語諸語のいずれに対しても、範疇を異にして大差がある。同じことは、チベット・ビルマ諸語、南アジア諸語……等に対してもいうことができる。（210 頁）

一方、村山（1979）は日本語が混合言語であると見ている。すなわち、日本列島における土着の言語は南島語であり、それがアルタイ語化して日本語が成立したとして次のように述べている。

さきに見たように、縄文時代には琉球から九州、西南日本にかけて南島系言語が行なわれていたと推定されます。中部日本、関東、北日本には九州、西南日本におけるほど有力に行なわれていたかどうかはわかりません。これらの地方ではアルタイ系の言語となんらかの関係をもつ言語が行なわれていたかもしれません。縄文晩期か弥生初期に朝鮮半島を経てアルタイ・ツングース的な言語（対格接尾辞ヲ、場所格・經由格・出発格ヨ、ユ、ヨリ、時間的出発格ユリをもち、未然、連用形をつくるラ、リをもち、居をもっていた言語）——それはすでに朝鮮半島において多かれ少なかれ南島語の影響をこうむっていたと思われます（南島語による第一次の影響）——が九州に渡来し、そこできわめて大量の南島語要素を吸収し（南島語による第二次の影響）、しだいに「日本祖語（原始日本語）」が誕生したであらう。

このようにして生まれた「日本祖語」は南島語要素を大量にとりいれたアルタイ系言語とも言えますし、またアルタイの格助詞、動詞活用、語順をとりいれた南島語とも言えます。あるいは「日本祖語」は、南島語を素材としアルタイ的言語を組織原理とした言語とも言えます。このような二つの構成要素をもつ言語は「混合言語」と呼ぶことができます。（295-96 頁）

日本語の基層が南島語であったとするのは、日本語のタミル語起源説を唱える大野（2000）も同じである。大野・金関編（2006）に収録されている考古学者・言語学者との対談で、大野は日本語が母音終わりの言語であることに注目して次のように述べている。

いえいえ、ぼくの考えはそうじゃないのです。ぼくの考えは、縄文時代に母音終わりの言語が西に、子音終わりの言語が東にあったとしますね。母音終わりの言語は、それではどこに仲間があるかと日本のまわりを探しても、大陸にはないのです。あるのは南のポリネシア語とかアウストロネシア語、そういった言語です。これらの言語は、もしローマ字で書いて比較すると、ほとんど日本語と同じ形をしているのですが、文法は弥生以後とぜんぜんちがう。文法は南の言語とちがうけれども、母音終わりは同じである言語が弥生直前まで西には残ったと私は考えるわけです。

つまり、縄文時代からずっとそういう言語が日本の西にはあった。それが弥生のときに語彙も文法も変わった。だけど、母音終わりという音韻の特徴だけは変わらなかった。それが水田稲作などを持った高い文明が北九州に来たから、それを受け入れてどんどん東に広がっていき、北ま

で広がった。そう考えることで説明がつくかなという。(195-96 頁)

北方語が基層語であり、南島語は後からやって来たという考えもある。これを提唱するのは川本 (1978) である。曰く、

私はこう推定します。日本列島には縄文時代の末期、アルタイ語的な言語 A が行われていました。そこへ秀れた稲作文化を担った南島語族が言語 B をもたらしました。土着の人々は新来の高度の文化を吸収するために、外来の言語 B を競って学びました。外来の人も土着の人も二重言語生活を強いられました。自分達の部落へ帰れば純粋の B または A を用いますが、一たん外へ出ると、単語は B のものですが A のくせのまじった混合言語 B' という共通語を使用しなければなりません。月日が流れ時代が移るにつれ、外来の人々の家庭では、老人がいくら純粋の B を使用する努力をしても、子や孫は外の同年輩の多くの人の使用する共通語 B' を好むようになります。かくて百年二百年たつうちには、外来の人たちの家にも、B' しか知らない人達が育つようになるのです。外の世界では、古くさい言語 A または A' と、しゃれた文化語 B' が長い間併存を続けます。しかし大勢には抵抗できず、やがて A も A' も亡びてしまったのです。(145 頁)

さて、私が今からやろうとしているのは川本 (1978) を検証して、その主張の核心である「日本語は南からやって来た」という考えを否定することである。川本に矛先を向けるのは、日本語の起源を南島語に求めた従来の研究の中で川本の研究がもっとも詳しく、またその主張が南方起源説の代表格と見なされるからである。

4.2. 日本語は南からやって来なかった

系統関係を論じる際に決め手となるのは、同源の語があるかどうかである。したがって、同源の語を探すという容易ならざる作業が系統論の基礎となる。そしてこの作業には落とし穴が隠れている。見かけだけの類似性がややもすると同系言語であるがゆえの類似性に見えてしまう。知らないうちに牽強附会におちいってしまうこともある。

この点に関して、川本の研究も例外ではない。川本は日本語と同源の南島語をたくさん見つけたが、見当ちがいが少なからずした。正否の判断がつかない例や怪しげな例は数えきれない。

川本はデンプヴォルフ (1934-38) 以外の文献も利用しながら日本語と南島語との比較を行っている。そして、扱われている南島語は次の 5 種類である。

- 南島祖語 (Proto-Austronesian=PA)
- インドネシア祖語 (Proto-Indonesian=PI)
- オセアニア祖語 (Proto-Oceanic=PO)
- 東オセアニア祖語 (Proto-Eastern Oceanic=PE)
- ポリネシア祖語 (Proto-Polynesian=PP)

4.2.1. 日本語と同源の南島語

川本（1978：273-305）は、日本語と同源と見なす南島語を数多くあげている。その中で川本の判断に狂いはないと私が見なす組みあわせには、ことごとくそれと同源の古代中国語が見いだされる。そのような例を古代中国語とともに示してみよう。なお川本がfで表している古代日本語の音はφで表す。また川本による南島語の表記には大文字のCとRが見られるが、Cは[t]と[ts]の中間音を表し、Rは「喉の奥で発音する摩擦音的なr」を表すと言われている。

㊦ φagi（脛）↔ ㊰ paqi「すね」

◆ 古代中国語の fienj（脛）「はぎ・すね」と同源。

㊦ φaku（佩く）↔ ㊰ pakay「着用」

◆ 古代中国語の buəg（佩）「おびる・はく」と同源。

㊦ φanaru（離る）↔ ㊰ panaw「さる・いく」

◆ 古代中国語の pianj（放）「はなす・はなつ・はなたれる」と同源。

㊦ φanatu（放つ）↔ ㊰ banaq「射つ」

◆ 古代中国語の pianj（放）「はなす・はなつ・はなたれる」と同源。

㊦ φī・φo（火）↔ ㊰ hapuy「火」

◆ 古代中国語の muər（火）「ひ」と同源。

㊦ φokori（埃）↔ ㊰ bebek「ほこり」

◆ 古代中国語の・əg（埃）と同源。喉音の・はφやbの音に変わりうる。川本はφokoriの祖形を pök- とするが、賛成できない。-riは動詞語尾の -ru に由来する形か。

㊦ φuku（葺く）↔ ㊰ bubuŋ「屋根」

◆ 古代中国語の p^hioŋ（覆）「おおう・かぶせる」と同源。

㊦ kara（殻）↔ ㊰ karaq「貝殻」

◆ 古代中国語の fier（匚）「かくす・おおいかくす」と同源。

㊦ kara（枯・涸）↔ ㊰ kaRaŋ「乾燥」

◆ 古代中国語の xiər（晞）「かわく・かわかす」と同源。

㊦ kirara（雲母）↔ ㊰ gilaŋ「かがやく」

◆ 古代中国語の xiuaŋ（輝）「かがやく・てる・かがやき」と同源。

㊦ korobu（転ぶ）↔ ㊰ guluŋ「回転」

◆ 古代中国語の fluər（回）「まわる・まわす」と同源。korobuの -bu は動詞語尾。

㊦ körömö（衣）↔ ㊰ kuruŋ「かこう・つつむ」

◆ 古代中国語の kuar（褰）「つつむ・つつみ」や fier（匚）「かくす・おおいかくす」などと同源。

körömö の -mō は kurumu (包む) の -mu と同源。

㊦ kukumu (含む) ↔ ㊦A kuŋkuŋ 「保持・包囲」

◆ 古代中国語の fiam (含)「ふくむ」と同源の豊語。日本語の fukumu (含む) も同源の豊語である。

㊦ kuruma (車) ↔ ㊦I gulun 「回転」

◆ 古代中国語の fuar (回)「まわる・まわす」と同源。

㊦ kurumu (包む) ↔ ㊦I gulun 「巻く」

◆ 古代中国語の fuar (回)「まわる・まわす」と同源。ただし、kurumu の祖形は kurukumu で、-kumu は古代中国語の fiam (含)「ふくむ」あるいは kab (蓋)「おおう・おおいかくす」と同源ではないかと思われる。

㊦ kuti・kutu (口) ↔ ㊦A ŋusu 「くちびる」, ㊦E ŋu(ts)u 「くち」

◆ 古代中国語の xuađ (喙)「くちばし・人の口先」と同源。

㊦ manima (随・随意) ↔ ㊦A manin 「…とともに」

◆ 古代中国語の buan (伴)「とも・ともなう」と同源の豊語。

㊦ naku (泣く・鳴く) ↔ ㊦A Canis 「泣く・鳴く」

◆ 古代中国語の deg (啼)「なく」と同源。naku の n- は deg の d が鼻音化した音。この種の変化は日本語では珍しくない。

㊦ nögi か nogi (芒) ↔ ㊦A seŋet 「とげ」

◆ 古代中国語の ts^hiek (刺)「さす・とげ」と同源。籾の先についている針のような堅い毛を表す nögi あるいは nogi の n- は舌音・歯音が鼻音化したもの。

㊦ öki (息) ↔ ㊦A aŋin 「かぜ (風)」

◆ 古代中国語の siäk (息)「いき」と同源。語頭の s- はしばしば消失する。ちなみに、日本語の kaze (風・風邪) は古代中国語の k^həd (氣)「いき」と同源である。

㊦ sarasu (曝す) ↔ ㊦A tara 「さらす」

◆ 古代中国語の sēr (晒)「さらす」と同源。

㊦ siduku (滴) ↔ ㊦A tu(ŋ)Duk 「したたる」

◆ 古代中国語の tek (滴)「したたる・したたり」と同源の豊語。

㊦ sidumu (沈む) ↔ ㊦A subsub 「(月が) しずむ」

◆ 古代中国語の diəm (沈)「しずむ・しずめる」と同源の豊語。

㊦ sita (舌) ↔ ㊦I dilaq 「した (舌)」

◆ 古代中国語の diat (舌)「した」と同源。南島語では、d・t などが l・r によく変わる。

㊦ sömu (染む) ↔ ㊦A cemeD 「そめる」

◆ 古代中国語の siəm (滲)「しみる」と同源。

㊦ susumu (進む) ↔ ㊰ suŋsuŋ 「たちむかう」

◆ 古代中国語の tsien (進) 「すすむ」と同源の暹語。

㊦ taku (炊く) ↔ ㊰ danɗan 「加熱」

◆ 古代中国語の tiag (煮) 「にる・にえる」と同源。

㊦ tataɸu (湛ふ) ↔ ㊰ tabu 「汲み桶」

◆ 古代中国語の dəm (湛) 「(水を) たたえる・ひたす・しずむ」と同源。

㊦ tatara (踏躰) ↔ ㊰ sarsar 「ふいご」

◆ 古代中国語の t^huər (吹) 「ふく・息をふく・風がふく」と同源の暹語。

㊦ te・ta (手) ↔ ㊰ taŋan 「て」

◆ 古代中国語の thiog (手) と同源。

㊦ töki (時) ↔ ㊰ taqum 「年・とき」

◆ 古代中国語の dhiəg (時) 「とき」と同源。

㊦ töwö (十) ↔ ㊰ sapulug 「とお (十)」

◆ 古代中国語の dhiəp (十) 「とお」と同源。sapuluq の -luq は古代中国語の süg (数) 「かず」と同源か。

㊦ tuku (搗く) ↔ ㊰ TukTuk 「(食物を) くたく」

◆ 古代中国語の tog (搗) 「つく・ついてこねる」と同源。

㊦ tuɸaku (唾く) ↔ ㊰ luwaq 「つばをはく」

◆ 古代中国語の t^huər (唾) 「つば・つばをはく」と・ug (嘔) 「はく」との複合形に由来。luwaq の l- は tuɸaku の t- に対応する。

㊦ tuku (漬く) ↔ ㊰ tuku 「(染料に) つける」

◆ 古代中国語の dzieg (漬) 「ひたす・つける」と同源。

㊦ tuna (綱) ↔ ㊰ tuŋ(D)a 「引きづな」

◆ 古代中国語の diəŋ (縄) 「なわ」と同源。

㊦ turubu (交ぶ) ↔ ㊰ tuRut 「同伴」

◆ 古代中国語の diuər (維) 「つな・つなぐ」や ts^hier (次) 「つぎ・つぐ」と同源。

㊦ usu (臼) ↔ ㊰ hujus 「こする・すりくだく」

◆ 古代中国語の fluəd (潰) 「ついでる・ぶちこわす」と同源。日本語の ketu (消つ) や kesu (消す) とも同源と見なされる。

㊦ waku (別る) ↔ ㊰ paŋa 「枝わかれ」

◆ 古代中国語の p^hэг (派) 「わかれ・わかれる」と同源。waku は waku (分く・別く) に動詞語尾の -ru が付いた形。

㊦ wo (峯) ↔ ㊧ puncak 「みね」

- ◆ 古代中国語の p^hiuŋ (峰) 「みね」と同源。私見では、mine (峰) という語もこれと同源である。そして、puncak の -cak は古代中国語の teŋ (頂) 「いただき・てっぺん」と同源である。

以上のように、南島語と同源と見なされる日本語は数多く見いだされる。日本語と南島語だけを見ていると、日本語と南島語は紛れもない同系言語であると思われよう。そして、南島語話者が日本列島にやって来て日本語は成立したという確信が生まれる。川本はこういうふうに発想した。無理もないことである。しかし上に示したように、古代中国語を比較の対象に加えると、まったくちがった景色が浮かんでくる。

4.2.2. 日本語と南島語はなぜ似ているのか

日本語と南島語とが似ているのは、南島語話者が日本列島に渡来して、原日本語が南島語化したからではない。

今から 5000 年余り前、中国南部から台湾へ人々が移住した。約 7000 年前かもう少し後に長江中流域ではじまった稲作は 5000 年前には長江下流域から南中国一帯に拡まっていたはずであるから、台湾への移住者はおそらく水稻耕作者であった。水田をつくるために新天地を求めて移住したと考えられるが、移住の規模は分からない。しかし確かなことは、彼らが先史中国語話者であったということである。そうでなければ、南島語と古代中国語との間に本稿で観察したような類似性は絶対に見られない。南中国はもともと中国語圏ではなかったようだが、すでに当時、そこでは北方文化を担った人々が優勢になっていたと考えられる。

翻って、日本語と中国語との関係はどうなのか。日本列島には紀元前 10 世紀に稲作がもたらされたと言われている。今から 3000 年足らず前のことである。この点に関して重要なことは、九州北部への渡来が朝鮮半島を経由したかどうかを問わず、渡来民が中国語話者であったということである。従来の研究は渡来系弥生人の母語が何であったかにふれてこなかったが、私はここまでの稿でそのことを強調してきた。前稿では、日本語の助詞や助動詞でさえ、その素材は古代中国語であることを明らかにした。また、古代日本語における甲類と乙類と呼ばれる母音の区別が古代中国語の発音に影響されたものであることを明らかにした。語彙に関して言うと、古代中国語と同源の大和言葉は枚挙に暇がない。前稿で述べたように、日本語は縄文語と古代中国語との混成語である。あるいは、古代中国語が日本列島でクレオール化して日本語は成立したということさえできる。

このように日本語の形成にも南島語の形成にもかつての中国語が深くかかわっている。日本語と南島語が似ているのはそのためである。仮に南島語が日本列島に伝来したとするならば、日本語は南島語にもっとよく似ているはずである。たとえば、南島語にはきわめて多数の畳語が存在するが、それに対応する畳語が日本語にもっとたくさんあってよい。また、南島語では珍しくない牙音・喉音や舌音・歯音の l・r 音化が日本語でも観察されるはずだが、

そういう音の変化が日本語で起こった形跡はない。同源の語を見比べたとき、日本語の語形は総じて、南島語との間よりも古代中国語との間により顕著な似通いが見られる。

最後に指摘しておきたいことが一つある。川本 (1978) の研究は渾身を込めて達成されたすばらしい業績であるのだが、時としてそこに勇み足が見られることについてである。次はそういう例である。

南祖 *basaq 《濡れている》と南祖 *basuq 《洗う》は、面白いことに、どちらもフィジー語で音位転換が起こり、それぞれ saba 《洗う》, sabu-i 《カヌーを洗う》となっています。さらに面白いのは、この saba が重複すると、saba-saba 《清潔》になることです。

〈注 音位転換 単語の中の二つの音が互いに入れ替わること。子音の場合、「アラタ」arata (新) と「アタラ」atara (新)。母音の場合、「アフ・ギ」afu-gi (仰) と「ウハ」ufa (上)。〉

「ザブザブ」《洗濯》がフィジー語 sabu に、「サバサバ」「サッパリ」《汚れが取れて爽快》がフィジー語 saba-saba に対応しています。

ところで、伊勢物語に、

皆人乾飯^{かれいひ}のうへに涙おとしてほとびにけり。

という一節があります。《乾した飯が涙でふやけた》の意味です。この「ホトビ」《濡れてふやける》の「ホト」は現在の「ポトポト」(水滴)の「ポト」と同じ語だと思います。これが上下入れ代わったのが「ドボン」(水に落ちる音)です。「ト」と「ソ」は交替しますから「小雨ソホ降る」の「ソホ」も同じもので、このすべてが南祖 *sebu に対応しているのです。(119-20 頁)

「カク」や「コク」は子音がそのまま変わらずに残っていますからまだしもですが、この上に南島語的な鼻音代償の現象、つまり $p \rightarrow m$, $t \rightarrow n$, $s \rightarrow n$ などの変化が加わると、いよいよ語源が分かりにくくなります。

例えば「ニシ」(西)は、すでに「ニジ(虹)」の語源のところで出て来ましたが、南祖 *sibsib, オ祖 *sisib, 東オ祖 *sisipo 《西》の第一の s が n に変わり、末尾の po が落ちた形です。そもそも *sisipo は *sipo の部分的重複形であることは察しがつくというものですが、実際東オ祖 *sipo 《下方へ・海へ・水に入る》があるのです。《西》の意味は《太陽が海に沈む方向》から来ています。

「シホシホ」《涙にくれる様》, 「シッポリ」《濡れる》, 「シホ」《染物をするときに、布を染料にひたす度数》《海水・潮》, ばかりでなく、 $s \rightarrow n$ の交替によって「ニホ」《水にもぐる鳥》, $p \rightarrow m$ の交替によって「シモ」(下)。普通ではとても繋がらない「シホシホ」《涙》と「ニシ」(西)が、これだけ材料が揃っているからこそ繋がるのです。(122-23 頁)

ここで川本は、音位転換という抜いてはならない伝家の宝刀を平気で抜いている。basa・basu- を saba・sabu- と同源としているのである。川本はほかでもしばしばこの手を使って日本語と南島語を結びつけているが、私に言わせると音位転換は禁じ手である。そして実際、そういうやり方の説明はすべてまちがっていると見てよい。basa- と basu について言うと、これらは古代中国語の piet・pied (泌)「汁がしぼりだされる・汁をしぼりだす」と同源である。日本語の ϕ itu (漬つ) や ϕ itaru (漬る) や ϕ otobu (潤ぶ), また「ベタベタ」や「ビショビショ」という語も同源である。一方、saba と sabu- は古代中国語の thiəp (湿)「しめる・うるおす」や tsiəm (浸)「しみる・ひたす」や siəm (滲)「しみる」に通じる語である。日本

語の *simeru* (湿る) や *simu* (浸む) や *sömu* (染む・初む), また「ジメジメ」や「シミジミ」や「シャビシャビ」などもそれらと同源である。ちなみに, 「サバサバ」というのは関係がない。これは古代日本語の *saφasaφa* (爽爽) に溯る。この語にも対応する中国語が存在するが, これにはふれない。

「西」を意味する *sibsib* や *sisipo* の語頭音 *s* が *n* に変わり, 語末の *po* が落ちて *nisi* (西) という日本語が生まれたという考えにもついていけない。*sibsib* や *sisipo* は南島祖語の *subsub* 「(月が) しずむ」と同源であろう。また, 古代中国語の *diəm* (沈) 「しずむ・しずめる」や日本語の *sidumu* (沈む) と同源の暁語であり, 「日が沈む」という意味から「西」という意味が派生したと考えられる。しかし, *nisi* (西) という日本語をこれと同源と見るのはどんなものか。さらに川本はニホドリ (カイツブリ) を意味する *niφo* (鳩) もこれらと同源としているが, これははっきりと見当ちがいである。ニホドリは「鳩」という字が示すように, 「(水の中に) 入る鳥」のことである。したがって, *niφo* は古代中国語の *niəp* (入) 「はいる・入れる」と同源と見るのが妥当である。*nisi* (西) の *ni-* もこれと同じものであろう。そして *nisi* の *-si* は, *φimugasi* (東) の *-si* と同じ「方角」を表すと言われる形態であろう。

このように古代中国語と比較すると, 川本の主張には不審な点がいろいろと見つかるが, これは修正を施せばよい。「^{あやま}過^{すなは}ば^{はばか}則^なち改むるに憚ること勿かれ」という気概があれば十分である。私がここで強調したいのは, 古代中国語を介することによって日本語と南島語の先史研究は飛躍的に前進するということ, そして日本語は南からやって来なかったけれども, 日本語と南島語を比較することの意義はいささかも失われていないということである。

おわりに

本稿では南島祖語を古代中国語と比較して, 南島語が 5000 年余り前の中国語から分岐したものであることを明らかにしようとした。また, 日本語が南島語と似ていることについてこれが原日本語の南島語化によるものでないことを指摘して, 日本語の南方起源説を完全に否定する見解を示した。稿を閉じるにあたって二つのことを付言しておきたい。

(1) シナ・チベット・オーストロネシア語族を措定できる

従来, 中国語と南島語は系統的にまったく縁のない言語であると見られてきた。したがって, 中国語を中心とするシナ・チベット語族とオーストロネシア語族 (南島語) は縁のない別個の語族として扱われてきた。これは当然のことである。しかし本稿で明らかにしたように, 南島祖語と古代中国語との間には明らかに有意の類似性が観察される。そしてこれは, 二つの言語が同系言語であるがゆえの類似性であると断定できる。その当然の帰結として,

シナ・チベット・オーストロネシア語族なるものを新たに措定するのが妥当である。

南島祖語と古代中国語がいくら似ていようとも、分岐して 5000 年以上が経過して今は似もつかない様相を呈している南島語と中国語を一つの語族の中に組みこむのはいかなものかと見る向きもあろう。しかし、そのように考えるのは正しくない。そもそも語族というのは出自をもとにした分類であり、分岐がいつ起こったかとか今はどの程度の類似性が保たれているかといったことは一切問われない。仮にこういうことが問題となるならば、インド・ヨーロッパ語族なるものはほとんど成立しない。インド・ヨーロッパ祖語が分岐しはじめたのは 5000 年以上も前であらうし、インド・ヨーロッパ諸語間の類似性はまちまちである。あたりまえのことだが、どの言語も近い関係にある言語とはよく似ていて、遠い関係にある言語とはあまり似ていない。ちなみに私の見立てでは、南島祖語と古代中国語は近い関係にある言語である。近い関係にありながら、どんどん乖離していったのはなぜなのか。こういうふうに問うことが重要である。

（2）南島祖語はもっと精密に再建できる

南島祖語とは、中国語から分岐して間もない南島語のことである。しかし言語は一挙に変わるものではないから、南島語のはじまりがいつであったかを確定することはできない。もっとも、ゲルマン祖語やイタリック祖語がインド・ヨーロッパ祖語からいつ分岐したかといった問題に比べれば、南島祖語のはじまりを仮定することは簡単である。それは約 5000 年前の台湾で話されていたと考えて大過ない。

問題は、南島祖語の語形を再建することである。どんな言語でも、その祖語を再建するのは至難の技である。過去の文献資料を欠く南島語に関しては、それがとりわけむずかしかった。この意味において、それを行ったデンプヴォルフ（1934-38）の功績は偉大である。しかし当然のことながら、これは完成品ではない。後に続く研究者たち、特にブラスト（1970, 1980, 1983-84）によって新たな成果が積みあげられてきてはいるが、根本的な見直しはなされていない。

私が本稿の作業を進める中で大いに当惑したのは、発音が少し異なるだけの 2 語が両方とも祖語として認定されていることである。たとえば、「くさった木材・腐葉土」を意味する祖語として *bəkbək* と *bukbuk* があがっている。また「あわ（泡）」を意味する祖語として *bugha[q]* と *buja[h]* があがっている。「ふくらむ・（花や蕾が）ひらく」を意味する *ka(m)baŋ* があるかと思えば、同じ意味を表す *kə(m)baŋ* があるといった具合である。いずれか一方を祖形として選ぶべきである。[] や () は用いるべきではない。

南島語は先史中国語から派生した言語であるから、南島祖語の再建は古代中国語を基盤にして行うのが有効である。この場合、本稿で指摘した音変化、すなわち *g・k・ŋ* などの音の *h・b・m・p・l・r* の音への変化や、*d・t・dz・ts・s* などの音の *l・r* の音への変化は南島祖語

段階ではまだ起こっていなかったと仮定することが求められる。そうすると当然、たとえば tən̄jəh 「中心・中央」に加えて tələn̄jə 「中心・中央」をも祖語に組み入れるなどのことは控えねばならなくなる。tən̄jəh という形態も修正の対象になる。

デンプヴォルフが想定した k' (ダイエンでは c) の音も考え直す必要がある。私の調査では、この音に対応する古代中国語の音は d・t などの舌音か dz・ts・s などの歯音である。現在の南島語でも、その種の音である。にもかかわらず、k' が想定されたのは k が口蓋音化して k' になったと考えるからである。ダイエンの c も ky と ty の中間音ということになっているので、もとは k であったという考えが前提になっていると思われる。

古代中国語との比較は、語の意味を再建するうえでも大いに役立つ。デンプヴォルフは ka(m)pak 「うつ・たく・なぐる」という語を仮定しているが、これは古代中国語の kiam (斤) 「おの」と puag (斧) 「おの」とが複合したものであり、もとの意味は「おの」であったとするのが正しい。この語を引き継いだ今の南島語も「おの」という意味を表すのが通例である。mamit 「あまい」の意味もまちがっていると思う。これは古代中国語の muəd 「あじ・あじわい・あじわう」と同源と見なされるので、mamit の意味は「あじ・あじわう」とするのがよい。今の南島語の中にこういう意味をとどめている言語も存在する。

ところで、古代中国語が南島祖語の再建に役立つように、南島語が中国語の先史研究に役立つこともある。次はそういう例である。

ġlag (露) 「つゆ・あらわす・あらわれる」 ↔ rariŋ 「あらわれる・姿をあらわす」
 leŋ (鈴) 「すず」 ↔ giliŋ 「すず」
 loŋ (労) 「つかれ・つかれる・つかれさせる・労働」 ↔ qulaq 「職・仕事」
 luŋ (攏) 「あわせる・あつめる」 ↔ quluŋ 「あつめる」

古代中国語の二重子音 ġl・kl・xl の ġ・k・x は南島語では g・q・r になるかゼロになる。上の ġlag~rariŋ という対応は、デンプヴォルフの想定をもとにしたものである。しかしタガログ語に galiŋ 「出てくる・あらわれる」という語が見られることからして、ġlag~galiŋ という対応に改めるべきである。

注目を引くのは、古代中国語の l と南島祖語の gil・qul との対応である。この対応関係が意味することは、台湾にもたらされた先史中国語に語頭の ġ か k がまだ保たれていたということである。こういう問題も、これからの南島語研究と中国語研究が引き受けていかねばならない大きな課題である。

参考文献

池橋 宏 (2008) 『稲作渡来民—「日本人」成立の謎に迫る』講談社。

- 泉井久之助 (1975) 『マライ＝ポリネシア語——比較と系統』 弘文堂.
- 王 力 (1997) 『同源辞典』 北京：商務印書館.
- 大野 晋 (2000) 『日本語の形成』 岩波書店.
- (2004) 『弥生文明と南インド』 岩波書店.
- 大野 晋編 (2011) 『古典基礎語辞典』 角川学芸出版.
- 大野 晋・佐竹昭弘・前田金五郎編 (1990) 『岩波古語辞典』 (補訂版) 岩波書店.
- 大野 晋・金関 恕編 (2006) 『考古学・人類学・言語学との対話—日本語はどこから来たのか—』 岩波書店.
- 小沢重男 (1968) 『古代日本語と中世モンゴル語—その若干の単語の比較研究—』 風間書房.
- (1979) 『日本語の故郷を探る—モンゴル語圏から—』 講談社.
- 川本崇雄 (1978) 『南からきた日本語』 三省堂.
- グレイほか Gray, R. D. et al. (2009) Language phylogenies reveal expansion pulses and pauses in Pacific settlement. *Science* Vol. 323: 479–83.
- 崎山 理 (1974) 『南島語研究の諸問題』 弘文堂.
- (1978) 「南島諸語との系統的関係」『岩波講座 日本語—日本語の系統と歴史』 第12巻：97–150. 岩波書店.
- ダイエン Dyen, I. (1956) Language distribution and migration theory. *Language* Vol. 32, No. 4: 611–26.
- (1971) The Austronesian languages and Proto-Austronesian. In T. A. Sebeok(ed.), *Current Trends in Linguistics*. The Hague: Mouton.
- 塚本 勲 (2006) 『日本語と朝鮮語の起源』 白帝社.
- 土田 滋 (1988) 「オーストロネシア語族」 亀井孝ほか編著『言語学大辞典』 第1巻：1043–057. 三省堂.
- デンプヴォルフ Dempwolff, O. (1934–38) *Vergleichende Lautlehre des Austronesischen Wortschatzes*. 3 Bde. (Beihefte zur Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen) Berlin: Verlag Dietrich Reimer.
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』 岩波書店.
- 藤堂明保・加納喜光編 (2005) 『学研漢和辞典』 学習研究社.
- 藤尾慎一郎 (2011) 『〈新〉弥生時代—五〇〇年早かった水田稲作』 吉川弘文館.
- ブラスト Blust, R. A. (1970) Ptoro-Austronesian addeda. *Oceanic Linguistics* Vol. 9, No. 2: 104–62.
- (1980) Austronesian etymologies. *Oceanic Linguistics* Vol. 19, Nos. 1/2: 1–181.
- (1983–84) Austronesian etymologies II. *Oceanic Linguistics* Vols. 22/23, Nos. 1/2: 29–149.
- ベネディクト Benedict, P. K. (1942) Thai, Kadai, and Indonesian: A new alignment in southeastern Asia. *American Anthropologist* Vol. 44, No. 4, Part 1: 576–601.
- (1975) *Austro-Thai: Language and culture, with a glossary of roots*. New Haven: HRAF Press.
- 三谷恭之 (1988) 「オーストロ・タイ諸語」 亀井孝ほか編著『言語学大辞典』 第1巻：1041–043. 三省堂.
- ミラー, R. A. (1982) 『日本語の起源』 (村山七郎ほか訳) 筑摩書房.
- ムードレイほか Moodley Y. et al. (2009) The peopling of the Pacific from a bacterial perspective. *Science* Vol. 323: 527–30.
- 村山七郎 (1979) 『日本語の誕生』 筑摩書房.
- 李 男徳 (1988) 『韓国語と日本語の起源』 学生社.
- ワームとウイルソン Wurm, S. A. and B. Wilson (1975) *English finderlist of reconstructions in Austronesian languages (post-brandstetter)*. Canberra: The Australian National University.

(2014 年 10 月 10 日 受理)